

あけぼの会奨励賞

「お母さんが乳がんになったとき」

荒田 智美（あらた・ともみ）

45歳／公務員／鹿児島県

四年前のお盆に鹿児島に嫁いだ私は名古屋の実家に帰省した。母に会うのは八ヶ月振り。いつもどおり元気一杯の母がTシャツをまくり上げ、「お母さん乳がんの手術をしたんだよ。」と左乳房を私に見せた。「四月に手術したの。心配かけちゃいかんと思って黙ってたの。ごめんね。大したことはないから安心して。」そう話して服を下したら、いつも通りの母がそこに居た。母の左乳房は5センチ位の傷口があり、赤黒く爛れていたけれど乳房の形は以前と殆んど変わっていなかった。母の「大したことはない。」という言葉と、以前と変わらない姿に私は安堵した。「智ちゃんも検診受けてね。遺伝するって言うから、お願いよ。」母の言葉を土産に私は実家を後にした。

一年後、私は市のマンモグラフィ検査を受けた。母と同じ左乳房に1センチ大のヒトデ形の白い影が写っていた。「乳がんです。手術が必要です。検査を受けて幸運でしたね。もし次の機会の市の検査で見つかったら手遅れだったでしょう。」と医師に告げられた。

「母が私の命を守ってくれた。」そう感じた。そして自分が乳がんになって初めて、母の気持ちが理解できたかもしれない。

乳がんは10年は再発の可能性があるが、定期健診、補助治療が必要だということを初めて知った。幸い母も私もリンパ節への転移もなく、極めて早期の状態で見つかり、ホルモン治療だけで済んでいる。母は温存だったが、私は全摘することになった。左乳房も失うことはとても辛かったが、再発を避ける為に最良の手術だったので受け入れた。

退院してはじめて母に病気を打ち明けた。「早く見つかった良かったね。辛かったね。」そういって母は電話口で泣いた。私も涙が止まらなかった。「妹達にもマンモグラフィ検診を勧めないといけないね。」と母が言った。「早期発見が第一だからね。」と私。母はあと六年、私はあと八年再発の不安と闘いながら日々を過ごすことになった。遠く離れていてなかなか逢えないが、「がん友」として母と電話で励ましあっている。絶対に乳がんには負けない。生きていかなくてはならないから。